

林大だより



第 66 号 平成 25 年 10 月 31 日

長野県林業大学校翌校友会



2 学 年 オーストリア研修 (チロル州フィスの農家民宿にて)



1 学 年 屋久島研修



2 学 年 林業架線学実習 (木曽町)

林大の友は生涯の友

翌松会 会長 米山 正勝



糧となることでしょう。

初めて家を離れての生活も

早一年半が経とうとしています。全寮制の生活も、良き先輩や仲間たち、そして後輩たちにも恵まれ楽しんでる様子。二年生は就職試験等進路に取り組み時期であり、一年生は寮生活にも慣れ、充実した学生生活を送っている時期だと思います。

林業大学校での生活は、同じ志を持つ仲間が集まり、二年間同じ屋根の下で暮らし、自我自制・協調性を学ぶ良い機会となることでしょう。また、地元木曽町の夜間ソフトボールリーグやみこしまくり、駅伝大会などの行事にも学生・職員が積極的に参加し携わることで、地域の一員として一役を担っていると聞いています。林大で学んだことは今後の社会生活での大きな

昨年春に緊張と不安で迎えた入学式から一年半、寮生活を経験することで協調性や志の持ち方に変化を感じ、息子の成長を嬉しく思います。これも林大の方針として、初代市川校長から歴代引き継がれている「全人教育」（知識・技術に偏することなく、人間性を全面的、調和的に発達させることを目的とする教育）の精神を、校長はじめ林大職員の皆さんや教授の皆さんが理解のもと、ご指導いただいたからこそ感謝しております。

ります。

寮生活では、学生たちが実習や作業を経て林業を学び、地域社会への参加を通じて地域との繋がりを学び、寮生活という拘束と連帯のなかで自分の人生をどう生きていくかを自ら見出だす機会であり、喜びを分かち合ったり、時には人生論をたたかわせたり、悲しんだり、怒ったりを繰り返しながら友人としての絆を深めていくものと思います。

私も学生時代に全寮制の生活を経験し、卒業後も多くの級友と親交を続けています。小学校から高校までの親友もいますが、自分を理解してくれる親友は、やはり全寮制で二年間寝食を共にした親友たちです。学生の皆さんにも林大生活のなかで、人生の良き友、良き相談者となる生涯の友を一人でも多く作っていただきたいと思います。

森林・林業という駅伝

世代から世代への襷リレー

長野県林業大学校 校長 田島 裕志



二〇二〇年のオリンピック

開催地が東京に決まった。招致団の最終プレゼンの素晴らしさがテレビ、新聞で絶賛されている。英語力がよくわからないが、表情や仕草に強く訴えかけるものがあり、思わずライブで見続けてしまった。林大では、毎朝学生によ



入学式

るスピーチを行っているが、本当に伝えたいものがあるスピーチは、言葉を超えてハートに響いてくることがある。伝えたい想いと言葉がシンクロし大きな力を生み出すのだと思う。

さて、一九六四年に東京オリンピックが開催されてから五十年余が経過したが、当時は県内だけでも毎年一万ha以上の新植地が生まれていた。ちなみに現在は二〇〇ha程である。木材生産量も二〇〇万m³を超えており、現

在の三十万m³から考えると隔世の感がある。日本中がオリンピックに活気づいていた時期、山村も林業も元気だった。私の世代は、当時造成された森林の手入れが課題であり続けたが、今の学生諸君が社会で活躍するころは、木材の安定的生産と持続的森林経営がテーマになっていると思う。課題のステップアップだ。

森林に関わる職業が他の職業と決定的に違うのは、世代を越えた長期的な時間が背景に流れていることだと思う。五十年という時間は、親子・孫の三代に亘る時間に置き換えることができる。そして、それは、家単位を職場や地域社会に置き換えた場合でも同じだ。私達は親世代の人々が植えた木を育て、次世代の学生諸君に引き継ぐことになる。世代から世代への襷リレーともいえる。

このために重要になるのが、世代間の目標共有と、技術・知識等の継承だと思う。学生諸君一人ひとり自らの人生を切り開く一ページとして林大を選んだわけだが、社会では一人では生きていけない。先輩、同僚、後輩と様々

な立場の人々と共に働く喜びや、多くの人々に助けられているという感謝の気持ちを常に持ちつつづけてほしいと思う。

七年後東京オリンピックの開会式の時、或いは十五年後の林大五十周年の時、学生諸君は何をし、何を思っているだろうか。林大で過ごした青

春のひと時をどのように振り返っているだろうか。

先達に感謝し、育った森林をしつかり引き継ぎ、時代や地域をリードし、多くの人々を助け、困ったときには同期の卒業生に相談し、日々の仕事に振り回されながらも生き生きと働いている、そんな姿が私には思い浮んでくる。

林大生に期待する！

信州大学 人文学部長 吉田 正明



私が担当している「文学」の授業では、その半分くらいの時間を割いてサン＝テグジュペリの『星の王子さま』をじっくり読むことにしている。入学直後のまだ初々しい

一年生の前期の授業で扱う作品である。非常勤講師としてこの授業を担当するようになって今年で四年目なので、合計八十名の林大生と接した

ことになる。毎年それぞれ異なる特徴というものは確かにあるが、一方で林大生としてのカラーというべきか、全寮制の校風とでも言えるある共通した気質のようなものも感じられるのである。嬉しく思うのは、前年度教えた二年生が廊下で出会ったときにきちんと挨拶してくれることである。礼儀正しい純真な若人としての姿がそこにはある。

「心で見えないと、ものごとはよく見えない。肝心なことは、目に見えない。」星の王子さまが最後にきつねから授かった意味深長な言葉がこれであった。この物語は、自分

の星に残してきた一輪のバラの花への王子さまの愛情の純化あるいは深化を描いているとも取れるが、換言すると、深い愛の絆のパワーとその不滅性の発見の物語と解釈することもできよう。林大生一人一人がこの物語を読んで、そこからなにかを感じ取り、種が発芽して花を咲かせ豊かな実を生らせるように、この萌芽がこれから歩んでいく人生の糧のようなものに結実していくことを願ってやまない。

ところで、学期の後半は日本とフランスの近代詩の鑑賞にも時間を割いているが、この二年、みんなに「海」をテーマにした自由詩を作ってもらっている。多くは詩など書いたことのない学生たちであるが、「文は人なり」というビュツフォンの言葉にあるように、一人一人の詩情の萌芽がその創作詩にはうかがえるのである。もちろん玉石混交には違いないが、なかにはきらりと光る文才の片鱗を垣間見せてくれる力作もあり、なかなか興味深いものがそこにはある。みんなの感性がこれからさらに磨かれることを期待している。

森とともに暮らす、穏やかな社会

木曾町 町長 田中 勝己



だ。十月二十三日。」藻谷浩介？思い当たらない名前だ。「もたにこうすけ？」聞き返した。「里山資本主義の藻谷浩介だよ。俺友達なんだ。」

里山資本主義は、数日前新聞広告で見たことがあった。

八月の末だった。二日続きの会議が東京であつて上京した。翌日の午後、帰りまでに二、三時間の余裕があつて、古い友人を訪ねた。建築資材を扱う若い社長で、東京六本木にも木材工芸品などを売る小さな店も持っている。私はこの十一月末で町長を退任する。それで挨拶かたがた立ち寄ったのだが、「丁度町長に連絡を取りたいと思っていたところだった。」と歓迎され、「寿司食べながら話そう。」と誘われた。

私自身は単なる退任の挨拶だったが、S氏の方は、重い仕事だった。「藻谷浩介と対談してくれないか。もちろん二人の対談ではなく、コーディネーターもいて、他に二、三人の対談者という設定

が載っていた。里山資本主義などという用語は、経済学にはない。典型的な造語だ。いかにももったいぶった本だという印象だった。そんな著者との対談はごめんだと思いがら、「広告を見たが、本は知らない。」と答えた。「是非、読んでみてくれ。町長と同じなんだよ。話が合うと思うよ。」私と同じと言われ、興味を持ったが、「読んでから返事をする。」と言って別れた。帰りに書店に立ち寄り、本を買い電車の中で読みふけた。NHKの記者が広島支局に転勤し、中国地方の山村を五年間にわたって取材し、ドキュメント・シリーズで放映したが、その取材をも

とに書き上げたのが里山資本主義だった。

この対談そのものは、コ―ディネーターのN氏（NHK解説委員）の意向で、学者中心に変更となり、私の出演は消えた。里山資本主義とは、現代のマナー資本主義の最先端で、神経を研ぎ澄まして暮らす生き方に対比し、山里で穏やかに暮らす生き方を表す造語だった。S氏からは「来春、別に企画しますから。」と言われたが、残念さが残った。

今の時代は、山村がどんどん寂れ、衰退する。少子高齢化が進み、あと二十五年もすれば、木曽のような山村は二十%が無居住区になると予測されている。人口も六十%減少するというのが政府の予測だ。今の社会で、世の荒波に立ち向かって成功する人は、1%か2%。ほとんどは分解し脱落する。

山や川を大事にし、地域の資源に磨きをかけた地域づくり、私の町長十六年間は、そればかりを考えてきた歳月だったと思う。

学生のページ

あすなるの呟

つぶやき

学校・寮生活から

林業大学校の生活



1 学年 赤沼 恒太

長野県林業大学校に入学して、半年もの月日が経ちました。わたしの現在の生活を振り返ってみると、平日は四コ

マ（二コマ九十分）の授業を行いその後アルバイトに行き、夜八時から八時三十分頃まで働きます。つまりアルバイトなどがある日は、夜の限られた時間しか自分の時間がありません。この生活サイクルで最も感じたことは「時間の使い方の大切さ」です。勉強に関して言えば、一日四コマの授業をほぼ毎日行いうので、ある程度自習時間がなければ正直難しいです。寮生活

をしていると友達が常に近くにいるため、時間があれば遊びたい衝動に駆られます。アルバイトがない日は問題ありませんが、時間が限られているなかで勉強をしなくてはならないのに遊んでしまうことがしばしばあります。つまり少ない時間内で、自分がやるべきこととそうでないことを判断し実行する決意が必要になってきます。林大に入ってから一番身についたことは、この決断力だと思います。まだまだ自分に甘いと思うことも

多々ありますが、入学以前に比べ自分も少しは大人になれたなと感じます。



1 学年 化学実習（化学生物室）

私たちのクラス



1 学年 大川 雅貴

晴天に恵まれた入学式から約半年が経とうとしています。この半年には屋久島研修

や御嶽登山の二つの大きな行事がありました。しかし、この行事には大雨がつきものでした。屋久島では、大雨が降ったため普通なら楽しめるはずの場所が全く楽しめず、ただ濡れに行っただけのように思えました。また、御嶽登山では下山の時に大雨が降り精神的、肉体的に大ダメージを受けながら下山しました。日の出も見られなかったた

め、一番感動するところがありませんでした。ですが、今となればこれもとても良い思い出で、このクラスは何か持っていると思います。私たちのクラスはこの先も様々な天候に行く道を遮られるかもしれませんが、何事にも負けずクラス全員で進んでいきたいと思っています。

林業大学校に入学して



1 学年 柴田 修一

林業大学校に入学して約半年の月日が経った。今、振り返ってみると長いようで早い

半年だった。入学した当初は、心の中は不安でいっぱいだった。皆と初めて会い自己紹介をした時、「これから、共に生活し勉強していく人達なんだ」と思った。当然不安もあったが、逆に楽しみでもあった。そんなことを思いながら、いざ寮生活をしてみると不安は無くなった。先輩方は優しく、色々なことを教えてくれた。友達も次第に出来ていった。寮という環境だからなのか、今までよりも皆と打ち明ける時間が早かった気がする。

勉強面では、自分が思っていた以上に難しく苦戦した。しかし、きちんと話を聞きノートをしっかりと書き写しているの、テストでは赤点を取らずにいる。高校時代よりも内容の濃い授業を受けているので、知識と技術が高校時代の自分よりも成長している実感している。約半年でたくさんのかことを学ぶことができた。しかし、まだ始まったばかりである。これから



1 学年 樹木学実習（木曽町）

自然に恵まれた木曽にある林業大学校。自分はそこで林業のプロフェッショナルになるため、日々勉強に励んでいる。授業の内容は幅広く、林



1 学年 根井 悠斗

自然豊かな
木曽での娯楽

たくさんのかことを学ぶために自分に厳しく、努力していると思う。

業系の授業はもちろんのこと、一般教養もたくさんある。頭のいいさすがの僕も壁に突き当たることなんて、日常茶飯事だ。むしろ壁に突き当たらない人なんていないだろう。なぜかって？ クラストップの僕が言うんだから間違いないよね。まあ、冗談はさておいて。こういった困難に日々立ち向かっている僕としては、やはり体に蓄積されてしまうものがある。そう、それはストレスだ。さすがの僕でも発散方法が人それぞれで、マニキュアルどおりにいかないコイツには頭を抱えている。

林大の近くには水がとて綺麗で、魚がたくさんいる沢がある。この沢には、木曽岩魚と呼ばれているヤマトイワナや、アマゴ、ヤマメ、カジカなどが生息している。この素晴らしい環境で有意義な時間を過ごすことが今の僕のストレス発散方法であり、生き甲斐にもなっている。もう川では遊べない時期にはなっているが、来年はこの素晴らしい川遊びを全員に体験してもらいたい。娯楽は本当に楽しいけど、勉強に支障が出ない程度にほどほどにね。



1 学年 森 円佳

林大という環境

林大に進学することを決意したあの頃から約一年が経った。私はあの頃と比べて変化しているのだろうか？ 成長しているのだろうか？

今年の四月、授業や寮生活等で新しい知識を得て体験すること全てに一喜一憂している。



1 学年 ほお葉巻き体験（木曽町・ふるさと体験館）

た。自分でも驚くほど勉強し、予習や復習も今までに無いほど力を入れた。それと比較して約半年後の今はどうか。正直、学校の勉強は四月ほど力を入れておらず、学外で学ぶことが楽しくなってきた。私は今、「木育」に興味があるのだが、その為の知識は学校では得ることが出来ない。しかし、そういった外で学ぶ為には前提として必要な知識がある。私の場合、それは例えば木材や森林のことなのだ。それが、それらはここ、林大で学ぶことが出来る。外で学ぶ為の基礎となるものを、ここでは学べるのだ。その様な環境は大変貴重なものである。私はこの環境を大切に、残りの一年半を過ごしていきたい。そして卒業式で胸を張って入学前のあの頃と違う、成長したと言えるように頑張りたい。

いつちよ前の
男の誓い



2 学年
大鳥 正樹

「オレ林業やりたい」そう父に告げた。父は缶ビールを静かに置きうなずいた。二〇一二年春、未開の地「木曽」へ旅立った。新幹線から見える山は笑っているように見えた。林大での生活は思っていた以上に過酷を極めた。長時間の座学、過酷を極めた実習。何度もめげそうになり、あきらめかけたが、その度にあの時の父の姿が頭をよぎる。「お前ならできる」そう背中と言っている。そのような気がした。その父の姿を思い出しながらかこまでこれた。この辛かった日々は私の自信となつていく。「今風で言うチャラ男」そんな過去の自分とはおさらばだ！今まで



ラジオ収録で三四六さんとお話

林大ハンター



2 学年
高津 勇佑

お世話になった友人、家族、私の関わったすべての方々に恩返しをしたい。「倍返しだ！」

「僕は猟師になった」という本があるが、まだ読んでいない。読んでいいことはない

が、僕は猟師になった。きっかけは、近くの村の慰労会でクマの焼肉を食べたこと。都会育ちの僕にはかなりのカルチャーショックだった。というか、かなりハンターに興味を持った。長老ハンターの話は面白いし、クマ肉はうまい！という理由だけでハンターになったわけではないが。去年から狩猟を始めたわけだが、イノシシを獲るぞ！という気持ちで山を歩くと、今まで気がつかなかったものが見えてくる。獣道、足跡、糞などを見て、昨日の夜にきたなとかが分かって面白い。長老ハンターの後ろに付いていって、道なき山を歩きまわるのも面白い。林大では野生動物のことはほとんど学べないので、長老ハンターたちの教えは生きた知恵だと思う。もうすぐ猟期が始まるが、今年こそはイノシシを一頭獲りたいと思っている。



林大生活を
振り返って



2 学年
鳥澤 京平

正直、私はこの林業大学校に入る前から何故学校に入學して学ぶ必要があるのかとずっと疑問に思っていました。学ぶ意欲があるのだから、仕事しながらでも独学で勉強できると思ったからです。実際学校に入ってから授業を



2 学年 そば作り体験（木曽町）

受けてもどこか退屈な印象を受けました。

ただこの学校では、現場視察や林大OBの講演会、研究発表会を傍聴しに行くといった様々な行事が多々あります。高校を出てすぐ就職したのでは、会社の現場が中心となり、知識の幅が限られてしまうと思います。また、林業はその現場に適したの生長に顕著に表れる仕事でもあります。様々な現場の声を聴くことや県地方事務所林務課の人の話を聴くことで知識が充実し、ひとつのやり方にこだわらずに一つ一つの施業を色々な角度から見直していくことができるようになると思います。この学校に入るにあたって何が正しくて何が正しくないのかということにこだわらずに、柔軟な思考を持って、様々な知識を吸収していったのなら充実した学校生活を送られるのかなと感じました。

第1回 木曽町駅伝大会（惜しくも第3位）



木曽祭（パウムクーヘン作り体験）

息子が林大へ入学して早半年が経ちました。「林業関係の仕事に就きたい。」と中学生の時に言い出し、「ここへ進学する。」と自分で決めた林大でした。隣の塩尻市に住んでいますので近くて安心と思っていましたが、寮生活にアルバイトに何かと忙しいらしく、月に一度帰ってくればいい方です。でも便りのないのはよい便り。四月の屋久島研修旅行では、最終日に熱を出し先生の車に乗せて頂いての帰宅でしたから。あの折は先生方、本当にご心配をおかけし申し訳ありませんでした。体の事より体調を崩した事への精神的ダメージがある

四月の入寮の際、息子と共に林大を訪れると寮生たちが皆挨拶をしてくれ、声をかけて部屋まで案内してくれたことにとても感じました。こうした環境の中で先輩から多くを学び成長し、来年は先輩として後輩の先に立ち引引っ張っていける頼もしい存在に



小 平 博

無限の可能性

私がこの林業大学校に入学し、卒業式から逆算するほうが早いというような時期になりました。入学時は全寮制という見慣れないものにわくわ



2 学年 藤 沢 秋 信

くしていました。いざ生活すると、今までの家族との生活とは違った開放的な感覚と、周りに気を使う場面が常にあるという不自由とが混在する矛盾した生活の中にいました。そんな私が林大にきて思うことは、まるで振り子のよ

ナスに振ればプラスに返る。何かを得れば何かを失う。ラッキーなことがあれば不運なこともあります。大事なものは、大きくも小さくも振れた分（努力や気配りした分）と同じくらい返ってくるということ。林大ではこんな振り子のような世界があります。振れば振った分だけ未来に希望が持てます。残りの数ヶ月、振り子のように努力したいです。

お世話になります
井 出 聖 子保護者の
ページ

松 の 一 言

ようで心配でしたが、その後は林大生活を楽しみ頑張っている様子でほっとしています。林業の世界を学ぶには二年間は本当に短いものだろうと思います。縁あって知り合った仲間達と、中身の濃い学生生活を送ってほしいと願っています。

なつて欲しいと願います。

もう十数年前になります
が、私も林業技能作業士（グリーンマイスター）研修を経て林業架線設置から伐採、集材、運搬と林業に携わっていた経験があり、自然の中で働く素晴らしさとその反面、山での作業の危険性もよく理解しています。息子がその道の学校を選び、その職業の仕事につきたいという思いは親として嬉しくもあり心配もありますが、困った時は頼って欲しいと思います。

息子は四人兄弟の三番目。兄弟の中で無口で大人しい子でしたので寮生活を通じ、精神的にも肉体的にも大きく成長することを期待しています。無限の可能性にチャレンジして心も体もたくましく成長することを願っています。
P.S. たまにはそちらの話も聞かせて下さい。

木曽の地で

中村 小百合



息子が林業を将来の目標に入れたのは高二の頃でした。それまでは家業でもある飲食関係に就くものと思っていました。が、途中から父親や周囲の意見も取り入れて林業を知り、高三の夏に林大の施設内を見学させて頂きました。昭和の時代にタイムスリッ



休日のそうめん流し（野外教室）

プしたかのような木曽の地。少しの不安もあったでしょうが、林大は自然が好きな息子にとっては魅力を感じる場所だったのかもしれない。肝心な勉強の方はというと先生方を困らせる成績のようではありませんが、寮母さんが作ってくれた三度の食事は親側としてもとても有難いことです。土日の自炊もみんなと楽しみなが工夫して作っているようですし、息子にとつて木曽での生活は人生においてとても大切な二年間であると思います。

縁あって林大へ

藤沢 信雄



娘が受験のさなか、樹木医に興味があるというので、インターネットで検索すると「長野県林業大学校」のホームページをみつけました。し



1 学年 特用林産学実習（実習室）

かし、そのときすでに入試が終わっていました。
「縁がなかったな。もし、来年も受験勉強したら受けてみる？」と勧めておきました。一浪の末、今年の春、縁あって林大に入学できました。
親としては娘を木曽へ送り出すのにいろいろ心配はありました。しかし本人は親の心配をよそに、学校生活という寮生活を謳歌しているようです。
学校での実習、町の祭り、アルバイト、インターンシップなど今まで経験したことがないことばかりで、とても楽しいようです。楽しく無事に過ごせるのは周りの人たちの支えがあつてのことと感謝しています。親としても安心していています。
あと一年半ですが、将来の目標を見失わず、有意義な時を過ごして欲しいと思います。

強い夢は叶う

『一生の宝物』

和田 幸文



中学二年、学校祭の意見発表で『宝物は野球』との倅。中学で野球が出来なかった強い想いを一心に高校へ。三年

最後の夏は二回戦で目標は絶たれ、高校野球は終わったけれど、特別な『野球の宝物』を掴んだ事だろう。

進路を決めてからも野球への未練があるらしく、大学で続けたり、社会人として軟式で続ける仲間が羨ましいみたいだった。職に就き仕事と併せて、一生の宝物として思う存分、野球を楽しみ携ってほしいと思う。

この夏、後輩の長野県ベスト4に刺激されたのは勿論で、夏休み帰省での野球大

会、ソフトボール大会を満喫したと思われる。野球は初めての親子出場を待ち望んでいたオヤジは感無量であったのと同時に、動きが鈍くなった体に歳を痛感した。

春には家を離れる事が分かっていながら、昨年末に飼い始めた金魚を残され、夫婦して初めての飼育に苦慮している。次に帰省する時には少しでも大きくなっていれらと：

ある林大生の夢！

勝本 英樹



人は様々な分野で活躍している。その活躍の素養は、学生時代の経験で磨かれる。林大での二年間の学習で、学生たちは林業に対する素養を高めたことと思

を送っていた息子が、「聞き書き甲子園」に参加した。いわゆる林業の一端を知る第一歩となった。椎茸農家の話を聞き、林業を学ぶ決意を固めた。「林学」でなく「林業」を学びたい、そこで林大に入学。古里大分も長野に引けをとらない林業県だが、林大のような教育機関がない。息子の夢は林大のような学校を古里に作ることに知った。林大で磨かれた素養がすばらしい夢に繋がっていることを知り、林大に感謝！

林大に進学して

飯島 孝



に興味を持ち、高校二年、三年のオープンキャンパスで林大を訪れ先生や先輩方と交流をし進学を決めたようです。

入学後、全寮制ということ親としても不安はありましたが、同じ目標を持った仲間と三食共にした生活ができたことは何ものにも代えがたい貴重な経験をさせていたのだと思います。

早いもので入学してから一年半が過ぎようとしています。娘は小さい頃からレンジャーに参加し林業に従事する人達と交流したことで林業

娘も寮生活のなかでいろんな葛藤があったと思います。が、少しずつ成長し親としては林大に入学できて本当に良かったと思うとともに、支えてくださった先生方や寮母さ

んにはとても感謝しております。もうすぐ社会人となりま

す。林大でのすべての体験が、かけがえのないものとなり人生の糧になると思います。

残り少ない学校生活を精一杯頑張つて、夢に向かって大きく羽ばたいてほしいと願っています。



大生諸君！さて、バスケ漬けの高校生活



オープンキャンパス
(学生スタッフによる学校紹介)

憶えているかい？

城内 秀樹



「オレさあ、山ん中で仕事するような人になりてえなあ。」ボソッとそんなことを言って探してきたのが長野県林業大学だったな。「おまえさん、全寮制で四人部屋だぜ。本当に大丈夫なんかい？」「うーん、多分：大丈夫じゃねえか。」「何々、おー！こりや学費も安いし寮費含めたつてお金あんまり掛からねーぞ。おまけに屋久島やオーストリアにも行けるんだつてぞ。すげーなあ。おまえ親孝行だなあ。」そんな本音のような冗談のような会話を交わしてからもう二年になる…。今どうしてる？自分の目指す林業男子になるべく日々精進しているかい？希望が叶えばいいがな。まあ精一杯やってくれ。そりやそうと、いい学校で学べて良かった

たじやないか。少しは大人になったんじゃないか。友達や先輩や後輩や先生や寮母さんやバイト先のおばちゃんや周りの皆さんに感謝して残りの学校生活を送ってくれよ。迷惑かけるんじゃないぞ。それじゃあな。元気でやってくれ。

森のありがたさ

長瀬 裕明



息子は、林大用語(?)でオーバー・エイジ入学した者の一人です。林大入学前には将来の道を絞ることができず悩んでいる様子がうかがえます。ところが、自ら林大に学ぶことを決め、受け入れていただいていたことは迷うことなく、希望を持って生活できるようにになったようです。このような変化はなぜ起こったのか推測すると、もちろん「良き師、良き友」に恵まれたこ

とも大きいのですが、「森から発想する」ようになったことも、また大きいと思います。すなわち、息子の様子をみていると、森やそこで働く方々の実態をよく見、そこから考えを組み立てているように感じられます。現在の世界はバーチャル志向を強めていますが、生き物であるヒトが本心に安心して生活するには森の力がいかに大きいかを、息子を通じ親も勉強させられました。森は木本・草本のみならず土壌の微生物から鹿・熊までを含む、幅広い生物圏

を形成していることが、ヒトの心身にも響くのでしょうか。卒業後は森で働くことを希望している息子が、いつか森に恩返しできる日がくることを願っています。

二年間で変わったこと

山川 晃平



弟が林業大学校に入学して様々なことがありました。入学当初、兄から見る弟は少し頼りなく寮生活は大丈夫かなと少し心配でした。きつと私

以上に両親は心配していたと思います。しかし、そんな心配をする必要もなく家に帰ってくると林大の楽しい日々を両親に話す姿を見て私は安心しました。

そんな中、この二年間で両親は他界してしまいました。私は、兄としてしっかりと弟を見ていかななくては強く思いました。しかし私もまだ二十三歳で人生経験も多くな



2学年 森林保護学（佐久穂町）

こと言ってくれました。「兄ちゃん自分の進みたい道に進むべきだよ。」その言葉は、両親が言ってくれているように感じました。自分は林業の道を進んでいくと決めているからこそ言える言葉であり、そして弟の存在がすごく大きく見えた瞬間でした。私の知らないところで弟はこんなに成長していたんだと感じました。この二年間、林大の先生方や生徒の皆様には本当に世話になりました。そして、これからもよろしくお願

次世代の プロ達に



有限会社 須江林産
代表取締役
須江 豊
(第8期生)

長野県林業大学校を卒業して、早二十数年の時が過ぎました。思えば一瞬の出来事のように、気が付けば白髪交じりのおじさんになっていまし

共に林業を 学びましょう

木曾に基本あり、
長野県に応用あり、
世界に展望あり



教授
吉川 達也

この四月、林大にやって参りました。長野県の職員になって二十八年、初めて教育の現場に就きまして色々戸惑うことが多いですが、今は

檜の アドバイス

た。私の卒業時期は、バブル後期に重なり業界全体が好景気に沸いていたのを覚えています。毎週と言っているほど

木材相場の変動があり、原木でも製品でも形あるものはすべて商いの対象になりました。知つてのとおりバブル景気の崩壊に伴い、木材相場の下落とともに業界全体にも暗い影を落としました。両極端の時期を経験できたのは、今になってみると大きな財産に

なっています。経営が順調な時ほど、慎重な判断を行い万が一のために常に準備を怠らないことが重要です。

長野県の林業はまだまだ未開発の分野も多く大きな可能性を秘めていて、考え次第でいか様にも発展することができます。「誰でも表舞台で主役になることができる」のです。

ここで簡単に当社の紹介をします。当社は、技能職員六

名(平均年齢二十八歳) 事務職員一名 役員二名の事業体です。林業の知識もないまま十代で入社してきた若者も

今では、わが社の立派な戦力です。民有林整備事業を中心に業務展開しておりました

が、本年度より国有林事業にも参加をして事業拡大を計っております。今後は、バイオマス関連事業にも手を伸ばしていこうと考えています。

学生の皆様は、是非、長野県の林業の担い手として失敗を恐れずに何事に

なつてこれまで

県内各地の林業の現場を知り、

そこに携わる多くの人に接してきました。こうした県内の現場には、林業の基本を活かし、前進し応用された姿があり、現場を担当する人の理念

という考え方があります。そうした現場を勉強していきたいと思つています。今は戦後植えた木の多くが利用できる時代となり、よく「木を育てる時代から活用する時代への転換期を迎えている」と言

われます。まさに長野県の姿であり、この状況に対応した人材が求められています。私も昔教わつたことをもう一度見直して、色々な情報を取り

入れながら、時代に合ったことを教えていかなければならないと思つています。これらもいっしょに学んでいきましよう。

も挑戦してください。若いうちの失敗の数は、いざ成功の糧となり新たな可能性を見出すものです。今後多方面で活躍されることと思ひます。行政機関に行かれる方はお手柔らかに、民間事業体などに進まれる方はいざれお会いする機会があると思ひますが、私のできることであればどのようなことでもご相談ください。

最後に、当社社訓を紹介して結びます。『慈悲深く 商い堅く 利は薄く 気は長く して 末は安泰』

さらに林大には、海外研修という世界を見る時間もあります。木材は国際競争力を持たなければならぬため、世界の展望を見据えた勉強が必要ですが、こうしたことも私はもちろん学生も同じかと思ひますので、これらもいっしょになつて学んでいきたいと思つています。

最後になりましたが、私は学生の生活担当でもありますが、学ぶと共に学校生活もいっしょに楽しみましよう。

我 ら 林 大 生 !

1 学年
県植樹祭
(阿部長野県知事と)



朝のラジオ体操



2 学年
森林気象学実習 (王滝村)



1 学年
御嶽登山 (山頂)

2 学年
水無神社
みこしまくり
(木曽町)



編集後記

十月十三日には「木望祭」(寮祭)を開催し、多くの皆様にご来校をいただいた。その数日前のことであるが、夜、地域の八十三歳のお年寄りから電話があった。「木望祭を見に行くと、三人の学生と約束したが、親類の不幸があつて、どうしても行けなくなった。そのことを学生に伝えたい。」というものであつた。このことを学生に伝え、折り返し電話をしてもらった。後で話を聞くと、昨年、城山整備のボランティアへ行つた帰りにスーパで買物をしようとしたが、それぞれがナタやノコギリを持っていたため、不審者と間違われてはいけない、どうしよう、と道端で議論していたところ、通りかかったお年寄りが道具を預かってくださり、それから、その方とは「友人」としての交流が始まったそうだ。学生の短い二年間には様々な出会いがあり、多くの皆様に支えられているということを改めて感じたのであつた。

(M)